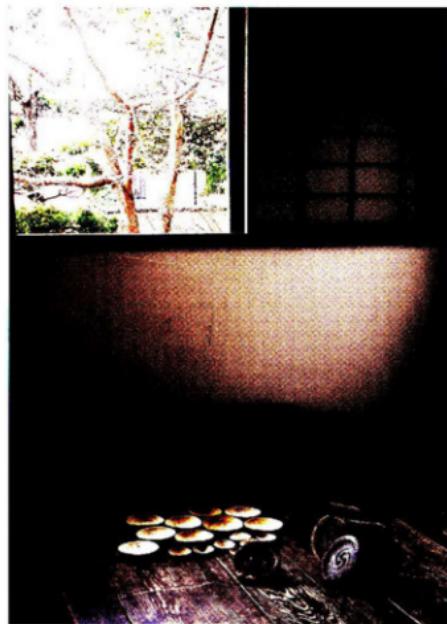


中家住宅周辺遺跡発掘調査概要報告書・I



平成15年3月

熊取町教育委員会

はしがき

古くから熊取野とよばれた本町城は現在まで変わることなく「熊取」として独立した地域を保持してきた町であります。

町内には重要文化財の中家住宅や降井家書院など江戸時代初期頃の文化財がありますが、他に43ヵ所を数える埋蔵文化財包蔵地があり、貴重な遺構や遺物が埋蔵されています。

熊取町教育委員会は皆様の御協力と御理解を得ながら、毎年50件程の緊急発掘調査を実施しています。この十数年埋蔵文化財発掘調査を実施し続けて多くの資料を得てきました。

本書は中家住宅平成13年度に熊取町五門の重要文化財中家住宅の歴史文化施設整備工事に伴って実施した発掘調査の報告書として作成したものです。今後多方面の研究に役立てられることを願っています。

最後になりましたが、本年現地での発掘調査にあたって御協力をいただきました土地所有者ならびに関係者各位に対しましてここで厚くお礼申し上げます。

平成15年3月

熊取町教育委員会
教育長職務代理者 川畠 修孝

例　　言

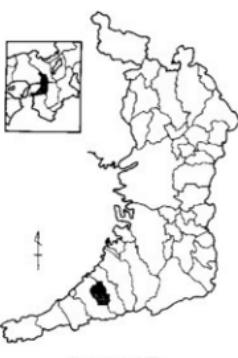
1. 本書は、平成13年度に熊取町教育委員会生涯学習推進課文化財係が実施した中家住宅周辺遺跡発掘調査における概要報告書である。
2. 調査は、熊取町教育委員会生涯学習推進課文化財係考古学技師前川淳を担当者として、平成13年7月17日に着手し、平成13年7月20日をもって終了した。
調査では、調査区を35mmカラーリバーサルフィルムと同白黒フィルムで撮影し、平板で調査区位置図（平面図）を作成、調査区壁面図を作成し、記録にとどめた。
3. 本書における図面の標高は、T.P.（東京湾平均潮位）を用いた。また方位は、地図以外については磁北を示すこととした。
4. 本書における図面の上色は、「新版標準上色帖」第10版（小山正忠・竹原秀雄編、農林水産省農林水産技術会議事務局監修、財團法人日本色彩研究所色票監修1990年度版）を用いて目視により比定した。
5. 本書の作成及び発掘現場での作業にあたって、下記の調査員・調査補助員・作業員の参加を得た。
池上裕也、関井澄子、永橋祥之、前田公子、山本恵子
6. 発掘調査現場で使用した機械類は、竹口文化財の提供による。
7. 本書の執筆は熊取町教育委員会生涯学習推進課文化財係考古学技師前川淳が行った

目 次

第1章 はじめに	
第1節 熊取町の地理的環境	1
第2節 熊取町の歴史的環境	1
第3節 周知の遺跡	2
第2章 調査の概要	
第1節 中家住宅周辺遺跡について	4
第2節 既往の調査	5
第3節 調査の契機	7
第3章 中家住宅周辺遺跡01-1区の調査	
第1節 層序	8
第2節 遺構	8
第3節 遺物	10
第4章 まとめ	21

第1章 はじめに

第1節 熊取町の地理的環境



熊取町の位置

熊取町は大阪府泉南地域の中央に位置し、貝塚市・泉佐野市の両市に囲まれた町である。町域は東西約4.8km、南北約7.8kmと南北に長い木の葉状を呈している。町域の総面積は約17.19km²を有する。地形による面積比を見ると、山地41%、丘陵24%、段丘23%、低地12%に区分され、山地・丘陵部が町域総面積の約3分の2を占めている。地域別に見ると、町南部においては、泉南地域の基本山地の和泉山地から派生する和泉丘陵とその縁辺部に発達する段丘部が多くを占めている。また北部では狭小ながらも河川の対岸に洪積地が形成されている。町域に水源を持つ河川は雨山川・和田川・大井出川・見出川の4水系が存在している。

いずれも町南部の山間部を水源としており南部から北部へ向かって流下し、泉佐野市を経て大阪湾に注ぎ込んでいる。本町が瀬戸内式気候区の東端に位置しているために年間降雨量が少量であることから、古くから町域一帯に多くの灌漑用の溜め池を目にすることができる。

第2節 熊取町の歴史的環境

町内の遺跡は現在43ヶ所を数える。

縄文時代以前の遺構は発見されていないが、東円寺跡の所在する熊取町野田の町立中央小学校で縄文時代早期の有舌尖頭器と石錫が検出されているので、東円寺跡は縄文時代からの複合遺跡である。

弥生時代の遺跡も発見されていない。JR熊取駅のある大久保における駅前整備事業に伴う平成元年の発掘調査では畿内第Ⅴ様式を示す上器が大量に検出され大久保E遺跡となったが、その土器は古墳時代初頭の所産と考えられている。

古墳時代の遺跡は、初期の大久保E遺跡以外知られていない。

飛鳥時代については、平成10年度の久保城跡98-1区の調査で複数の溝が検出され、その中から飛鳥V様式といわれる土師器や須恵器が出上した。

奈良時代についてはこれまで東円寺跡87-1区の調査で建物4棟と土壙、須恵器、土師器が検出されたのみにとどまっていたが、平成11年7月熊取町七山で西暦750年以降の奈良時代を示す多くの須恵器が宅地開発の発掘調査で検出され、熊取町第41番目の「七山東遺跡」となった。

平安時代については、野田の熊取町役場付近に想定されている東円寺の創建が、発掘調査で発見された軒瓦の比較考察から平安時代末とされている。また平成8年度には大久保から紺屋にかけての私立病院の発掘調査で黒色土器や須恵器、土師器が遺構内から検出されている。

鎌倉時代に関しては、熊取町内の遺跡のほとんどが同時代を中心とした様相を示している。野田の東円寺跡、久保の久保城跡、大浦の大浦遺跡、紺屋の紺屋遺跡、七山の七山東遺跡では瓦器を豊富に含む包含層が存在しており、建物・溝といった遺構も検出されている。

室町時代の包含層は町全域で検出される。重要文化財に指定されている和田の来迎寺の調査では戦国期の多数の土師器皿と瓦片が出土している。また小坪内西遺跡では15世紀末から16世紀に熊取を支配した細川氏被官の行松氏居館の一部の可能性のある遺構が検出されている。

江戸時代の遺構としては、五門の重要文化財中家住宅と大久保の重要文化財降井家住宅で多数の陶磁器や瓦の他、多くの溝跡・土壙が検出されている。近世の熊取は大庄屋2家の主導の基に成立したものであって、この2遺跡の周辺における調査は熊取町の歴史にとって極めて重要なである。

熊取町埋蔵文化財包蔵地一覧

番号	遺跡名	種類	時代	地図	立地	面積	主な成果等
1	降井家書院	建造物	室町～江戸	宅地	平地	4,000m ²	国指定重要文化財
2	中家住宅	建造物	室町～江戸	宅地	平地	4,500m ²	重文・江戸期から明治頃の陶磁器等出土
3	来迎寺本堂	寺院	鎌倉	宅地	丘陵段	3,100m ²	重文・15～16世紀の陶磁器・土師器等検出
4	池ノ谷遺跡	散布地	旧石器	木田	平地	62,300m ²	
5	甲田家住宅	建造物	江戸	宅地	平地	5,000m ²	
6	東円寺跡	寺院	繩文～江戸	宅地	平地	310,000m ²	繩文～江戸の復元遺跡・寺院は不明
7	城ノ下遺跡	城郭跡	室町	宅地	丘陵	61,800m ²	
8	成合寺跡	寺跡	地盤	町	山林	69,000m ²	14世紀代の600基以上の土塁墓群等検出
9	高藏寺城跡	城郭跡	室町	山林	山頂	34,800m ²	上以・堀切等の遺構を確認する
10	雨山城跡	城郭跡	鎌倉	山林	山頂	45,300m ²	月見ノ亭・馬場・千日敷の地名が残る
11	五門遺跡	散布地	古墳～江戸	宅地	丘陵	2,300m ²	土師器等が検出される
12	五門北古墳	古墳	古墳	宅地	丘陵	1,900m ²	現在消滅
13	五門古墳	古墳	古墳	宅地	丘陵	1,500m ²	現在消滅
14	大浦中世墓地	墓地	室町	町	墓地	18,400m ²	享徳四年(1445)铭の五輪塔地輪等出土
15	久保城跡	城郭跡	鎌倉	木田	平地	86,300m ²	飛鳥削の溝から須恵器・土師器、他瓦器多い
16	山ノ下城跡	城郭跡	鎌倉	宅地	平地	6,800m ²	
17	大谷池遺跡	散布地	古墳～江戸	池	平地	51,400m ²	
18	祭礼御所跡	祭礼御所跡	室町	山林	丘陵	6,300m ²	五門・紺屋共同墓地
19	正法寺跡	寺院跡	鎌倉	山林	丘陵	55,000m ²	
20	小坪内遺跡	寺院跡	江戸	道路	丘陵	7,000m ²	足少門寺跡、現在消滅
21	金剛法寺跡	寺院跡	室町	宅地	平地	5,100m ²	大森神社神宮寺
22	鳥羽殿城跡	城郭跡	室町	山林	丘陵	72,600m ²	
23	萬ノ谷遺跡	寺院跡	室町	山林	丘陵段	32,000m ²	
24	花成寺跡	寺院跡	室町	山林	丘陵	28,000m ²	
25	阿井家屋敷跡	屋敷跡	室町～江戸	宅地	平地	12,000m ²	屋敷地を区画する溝や近世の陶磁器等出土
26	大久保A遺跡	散布地	大浦	宅地	平地	8,100m ²	
27	下高田遺跡	条里跡	鎌倉	田	平地	5,700m ²	
28	大久保B遺跡	集落跡	余生～江戸	宅地	平地	47,800m ²	余生末～古墳初期の遺物
29	紺屋遺跡	散布地	古墳～江戸	宅地	平地	22,400m ²	余良～平安中期の河川跡検出
30	白地谷遺跡	散布地	室町～江戸	田	谷	129,600m ²	
31	大久保C遺跡	散布地	室町～江戸	宅地	平地	4,500m ²	
32	千石堀城跡	城郭跡	室町	山林	丘陵	1,000m ²	人正年間(1573～92)の雜賃衆徒の城跡
33	口無池遺跡	散布地	平安～江戸	宅地	平地	11,200m ²	平安末～鎌倉初期の遺構、遺物
34	大久保D遺跡	散布地	鎌倉～江戸	宅地	平地	9,200m ²	
35	大浦遺跡	散布地	鎌倉～江戸	宅地	平地	4,900m ²	13～14世紀の瓦器等検出
36	大久保A遺跡	散布地	鎌倉～江戸	宅地	平地	4,400m ²	建物跡、8～14世紀の土器
37	大久保E遺跡	集落跡	余生～江戸	宅地	平地	2,900m ²	余生末～古墳初期の遺物多数
38	大久保B遺跡	集落跡	鎌倉～江戸	宅地	平地	5,000m ²	13～14世紀の瓦器等検出
39	中家住宅周辺遺跡	集落跡	室町～江戸	宅地	平地	21,300m ²	近世の陶磁器多数
40	朝代北遺跡	散布地	鎌倉～室町	宅地	平地	60,000m ²	13～14世紀の瓦器等検出
41	七山東遺跡	散布地	余良～室町	山	平地	80,000m ²	古代須恵器・土師器・瓦器等検出
42	小坪内西遺跡	集落跡	余良～室町	宅地	平地	3,600m ²	古代須恵器・瓦器・瓦器等検出
43	大久保D遺跡	集落跡	余生～室町	宅地	平地	1,436m ²	石鉢・平安頃の埴物等検出

熊取町遺跡分布図



第2章 調査の概要



第1節 中家住宅周辺遺跡について

中家住宅周辺遺跡は平成8年11月熊取町五門地先における水道管設置工事の際に、近世の陶磁器破片が30数点発見されることにより新規に設定された集落遺跡である。本遺跡は重要文化財中家住宅の周辺に分布していると考えられる中近世の遺構と遺物を対象としたものである。重要文化財中家住宅では主に公共事業に伴って確認調査・本調査を数度実施し、近世を中心とする埋蔵文化財を検出している。極微量の瓦器微細片を除けば、大部分が近世の陶磁器と大量の瓦片であり、中家住宅の年代を推測する好材料となっている。

中氏は現在当地に居住していないが、現存する文献資料から知る範囲では、中世以来熊取を代表する豪族であったことが窺われ、近世に至って岸和田藩下で筆頭庄屋を勤めるなど、熊取最大の名望家であることを疑う余地はない。残された江戸期の絵図面から、現在の重要文化財中家住宅は江戸時代の最盛期の屋敷地に比して半分程の面積に狭まったことが推測され、また屋敷地の周囲には中家に所縁のある人々の集落があったのではないかと推測される。これを裏付けるように中家住宅周辺遺跡から出土する埋蔵文化財には近世の陶磁器類と瓦破片が最も多く、中家住宅敷地内から出土する遺物と極めて類似性が強い。

中氏が熊取を離れた後は、屋敷地には郵便局や郷土資料館、倉庫、公園などの公共の施設が

設置されたため、調査をする以前に遺構面が破壊された場所が多い。

従って中家住宅の歴史を考古学から考究する際には、比較的遺構面の破壊が軽微な中家住宅周辺での発掘調査の成果に期待する部分も少なくない。中氏にまつわる幾つかの伝承そのものが熊取の歴史として語られる部分も多いため、今後発掘調査による客観的な成果によって、熊取町の歴史に迫ることもできるだろう。

第2節 既往の調査

NKJ93-1区（熊取町埋蔵文化財調査報告第21集 平成6年刊）

93-1区の調査は現在の重要文化財中家住宅より東方約200mの商店や住宅が密集する地域の一角であり、中家住宅における調査地点としては最も中家住宅から離れている。15世紀代の瓦質羽釜や青磁碗を含んだ溝SD 1を検出し、また江戸初期～中期の陶磁器破片や享保年間の墨書のある漆喰塗りの土蔵の扉の破片と大量の瓦片を出土するなど大きな成果をあげた。

溝SD 1とその出土遺物は中家住宅周辺で実施した全ての調査における最も古い資料であり、15世紀には93-1付近に人家が存在していたことを示す貴重なものである。

93-1区調査地点が過去に中家の屋敷地の領域に入っていたのかは不明であるが、出土品のうち江戸初期の茶器が存在することなどから、おそらく中家屋敷地の一角であったと思われる。墨書のある土蔵破片もこの地点が中家の敷地に入っていたことを示すものであると考えてよい出土品である。

上蔵の漆喰塗り壁片墨書文字

「…〇石〇〇…花面酒式石五斗」

NKJ94-1区（熊取町埋蔵文化財調査報告第25集 平成8年刊）

94-1区の調査は中家住宅のすぐ南側にかつてあった熊取町郷土資料館を壊して、新たに歴史文化施設として資料館を建設する計画が立てられた際に実施したもので、主に江戸時代後期から末期の遺構・遺物を検出したものである。直径1.8mの埋桶が2基並んだ遺構が秀逸であるが、多くは江戸末期の瓦破片を廃棄した土壌が多く、明らかに江戸初期を溯源するものは遺構・遺物とともに皆無であった。

またこの時94-1区とは離れた重要文化財中家住宅東側の庭内に雨水管を設置する工事が併行して実施され立会をした際には母屋東側の母屋に接する場所の地下約0.8mに、最大直径0.8mの巨大な土師質の埋甕1基が検出された。17世紀初頭頃の埋甕のものであると考えられる。このことから17世紀初頭つまり江戸時代初期の状況は、現在よりもおよそ0.8m程低い場所に生活面が存在していたことが考えられるようになった。現地表面から下0.8m付近までは江戸末期もしくは明治期に大規模な造成が行われて大幅な盛土が築かれたものと考えられる。

NKJ96-2区

NKJ96-2区は平成8年7月に町道五門七山線の拡幅工事に伴って、重要文化財中家住宅の

庭園内東端部分に実施した確認調査であり、図のように2ヵ所を機械掘削した。

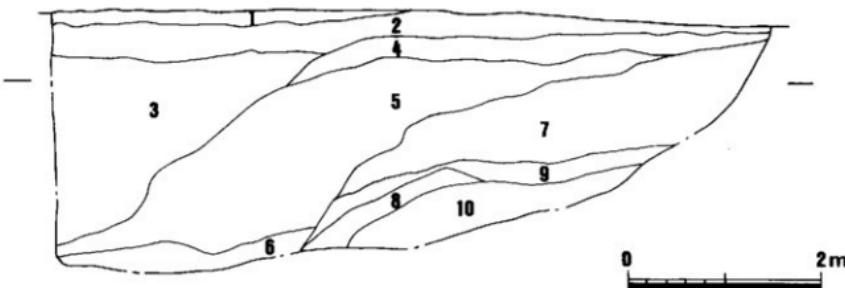
NKJ96-2区の土層

調査では地表面から約2.7m掘削し、現在の中家住宅の経緯を知る上で貴重な資料を得ることができた。現在の中家住宅の屋敷地は住吉川の土手際まで面しているが、調査区は屋敷地の最も北東端部分に設定し、河岸に相当している。

土層は大きく傾斜しており、河岸斜面に大幅な盛土を行って、上面を平坦に造成する大掛かりな造成工事があったことを如実に物語っている。図の⑩層は元来の地山で、その上部の③⑤⑦層には多くの瓦片が混入していた。採取した瓦はほとんど全てが19世紀代の所産で江戸末期～明治初期頃のものと思われる。通常は地山に近い上層程古いと言えるが、瓦破片の比較から、時間的差異は観察できない。

この調査区の資料は、江戸末期～明治初期頃に中家住宅北側の住吉川方向の土手斜面に大幅な盛土を行って、屋敷地を拡大したことを意味している。

また調査区は中家住宅母屋部分を含むものでないため、正確な判断を下すことはできないが、おそらく現在重要文化財に指定されている中家住宅の母屋は、この江戸末期～明治初期の造成で行った盛土の上に立てられている。江戸初期の建築様式を残しているといわれる母屋は、江戸末期～明治初期に屋敷地の拡大に伴って全ての礎石を移動するなど大きく建替えられたものと考えられる。



中家住宅96-2区 調査区2 東壁面図

1. 現表土 (腐葉土)		
2. 10YR 8/2	灰白色	砂質土
3. 10YR 6/2	灰黄褐色	砂質土
4. 10YR 7/1	灰白色	砂質土
5. 2.5Y 7/3	浅黄色	砂質土
6. 10YR 7/1	灰白色	砂質土
7. 10YR 7/3	にぶい黄橙色	砂質土
8. 10YR 5/2	灰黄褐色	砂質土
9. 10YR 7/1	にぶい黄橙色	砂質土
10. 10YR 6/1	褐灰色	砂礫土

NKJ96-4 区

重要文化財中家住宅の母屋を出て表門を潜ると、まっすぐ南側に向かう通路が延びており、国道170号線に面する通用門に至るが、この二つの門の間を通路として舗装整備する際に実施した調査が96-4区である。江戸末期頃の性格の不明なピットを10基ほど検出したが、江戸初期を遡る遺構や遺物は無かった。またいわゆる包含層と呼べる層はない。地山面を削平しながら近代の層が存在している。住吉川に面する中家住宅北側に比べて、中家住宅の南側の96-4区は、地山面までの深さは比較的浅いが、明治期から昭和年代の様々な工事で中世もしくは近世期の遺構面・包含層は決定的に破壊されている。比較的掘削深度の大きかった土壌などの遺構のみが残存しているのが現状である。

NKJ96-5 区

96-5区の調査は重要文化財中家住宅前の国道170号線に路線バス停車帯（バスバース）の建設工事に伴って実施した。96-5区の調査区は、平成6年度に重要文化財中家住宅の西側に存在した熊取町郷上資料館を取壊して、新たに資料館を建設する計画が立てられた際に実施した94-1区の調査区の南側に面している。94-1区の調査は遺構の記録保存のため本調査を実施しているが、検出した遺構は江戸時代後期以降のものばかりである。

96-5区の調査は搅乱も多く、埋桶土壌と思われる円形の土壌1基を検出するにとどまった。遺物も江戸中期を遡るような個体は検出しなかった。この結果は概ね94-1区の調査結果とほぼ同じである。

第3節 調査の契機

文化財保護法第57条の3 第1項

申請地：熊取町五門西一丁目29-6、29-7

開発者：熊取町長 上垣正純

工事の概要：公園造成

受付日：平成13年6月29日

遺跡名：中家住宅周辺遺跡

重要文化財中家住宅母屋の南西約30m付近の民家を熊取町が購入し、公園化する計画が生じて、事前に埋蔵文化財の確認調査を実施することとなった。

文化財保護法第58条の2 第1項：埋蔵文化財発掘の通知

提出日：平成13年6月26日

届出者：熊取町教育委員会教育長 甲田太三郎

平成13年7月17日～20日、機械掘削によるトレーナー6本（1本約3m²大）を実施。調査区5より大量の土師器破片と瓦破片を検出し採取。状況を記録。後に公園造成工事で地下の埋蔵文化財を破壊する可能性のないことを確認したため、本調査を実施することなく終了。平成14年度に報告書を作成刊行することを決定する。

第3章 中家住宅周辺遺跡（NJS）01-1区の調査

第1節 層序

5000片以上に及ぶ土師器皿を検出した調査区5の壁面を標準土層としてその層序を下に述べる。

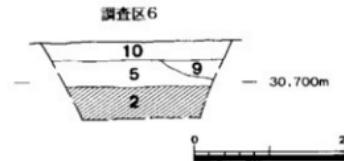
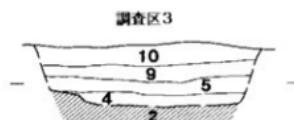
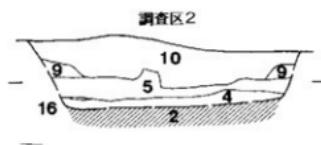
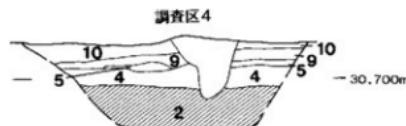
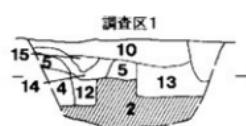
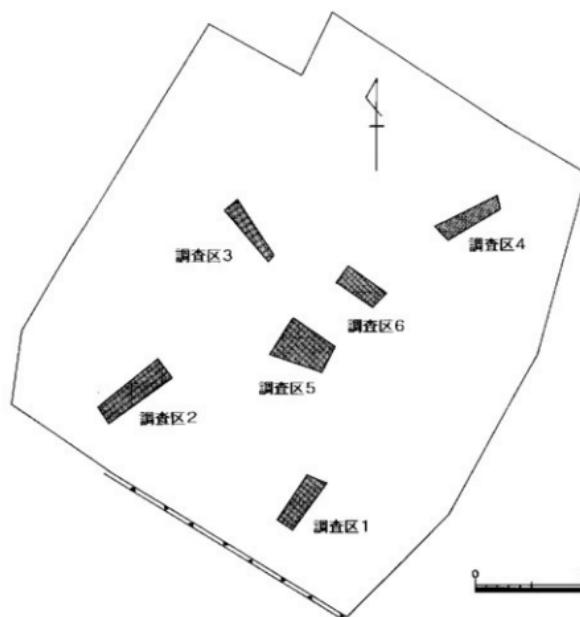
- 検出した壁面土層を分層した。（最下層の地山から）
- ①2.5Y 7/8 黄色 粘質土（地山）
 - ②2.5Y 7/6 明黄褐色 粘質土
 - ③5Y 5/2 オリーブ灰色 砂質土（瓦片を含む）
 - ④10YR 6/2 灰黃褐色
 - ⑤10YR 6/1 褐灰色 砂質土（中近世土）
 - ⑥5Y 5/1 オリーブ灰色 粘砂土（土師器皿多数検出）
 - ⑦2.5Y 5/2 暗灰黄色 粘砂土（瓦片多い）
 - ⑧2.5Y 8/1 灰白色 粘土
 - ⑨2.5Y 6/8 明黄褐色 粘土
 - ⑩7.5YR 4/1 褐灰色 砂質土（表土:昭和30年頃）

①と②は純然とした当地点の地山である。人為的な最下層は③である。③には瓦破片が含まれており、16世紀後半～17世紀初頭の年代が与えられそうである。この③層は今回の対象地の全域には見られない上層であり、地山②を50cm程も掘り込んだ後に堆積したことが観える。この土木事業の性格は不明であるが、⑤層で埋立てられている。⑤層は全てのレンチ調査区で検出される層であり、その最上面は海拔40.0m付近に求められる。この⑤層の上から上層SK 1 が穿たれ、大量の遺物（土師器皿片・瓦片・陶磁器）を伴う⑥層、さらに⑦層が土壤に堆積し、さらに⑧⑨層で完全に埋立てられた模様である。従って土壤SK 1 の開鑿されたと考えられる17世紀前半期の地表面は⑨と⑩の境界、海拔40.0m辺りである。もう一度整理すると、調査対象地が初めて屋敷地として造成された際の整地作業に拘わる土層は③であり、2度目に大規模な整地を実施した際に生じた層が⑤層であると思われる。

第2節 遺構

土壤SK 1

今回の調査は公園造成工事における事前の確認調査であり、個々 3×1 m 程の小範囲のレンチ掘削を 6 本実施したものであったため、調査区 5 内で大量の遺物を出した上層SK 1のみを検出するに止まった。調査区 5 のレンチそのものがSK 1 と重なったためSK 1 の詳細な平面形態は不明であった。その断面形態は調査区壁面図に記した。



第4章 遺物

瓦	軒丸瓦13、丸瓦48、軒平瓦3	327
近世土師器	皿5575、瓦質羽金2、不明10	5587
近世陶磁器	唐津碗1、唐津皿6、丹波摺鉢1、丹波甕2、備前摺鉢1	11
合計		5925

*点数は接合前の破片(断片)の状態で計算

遺物

今回の調査では僅か5m程のトレンチ1ヵ所(調査区5)の中から実に5755片もの近世初期の土師器皿破片を検出した。また調査ではそれらの土師器皿破片に劣らない程多くの瓦破片を検出したが、瓦は重量的に余りに嵩張るために遺存状態の良好な個体を優先にサンプルとした。調査区5以外の5つの調査区からも同種の瓦破片を検出したが、調査区5のサンプルよりも遺存状態が不良であり、かつ土壤等の遺構からの出土ではなかったために、採取しなかった。瓦片には若干の年代差を認めるものの概ね17世紀初頭～前期の年代が与えられるだろう。軒丸瓦瓦当面の観察から、軒丸瓦の最も古いものは17世紀初頭頃の所産であると考えられることから、中家が現在の場所に豪壮な屋敷地を構えた創建期を示すものであると考えられる。多くの軒丸瓦は江戸時代初期の所産であると考えられるもので、江戸時代初期の中家がどのような趨勢にあったのかを示す貴重な所産である。

遺物による本調査地における埋蔵文化財の年代の中心は、17世紀初頭～17世紀中頃と考えられる。

土師器

白色土師器皿・小皿

土師器の皿破片は破片数にして5755破片に及んだ。土師質の皿は法量によって数種類に分類されるが、すべて同じ胎土から生産されていることが一目瞭然である。

法量は①直径12.0cm前後、器高2.3cm前後

②直径10.0cm前後、器高2.0cm前後

③直径9.0cm前後、器高1.8cm前後

④直径6.0cm前後、器高1.5cm前後

⑤直径5.0cm前後、器高1.3cm前後

と完全に5種類に分類できる。④と⑤はいわゆるへそ皿と呼ばれる小皿である。

これらの皿類は堺環濠都市遺跡などで検出されているものと同様と考えられる。

胎土は精製された粘土で粒子が極めて細かい。土器表面に稀に観られる砂粒や結晶等は全く観られない。

焼成は良好と言えそうだが、多くの皿・小皿とも土師器独特の赤味がかった色調ではなく、多くが白色から黄味がかった薄肌色を呈する。

外形的に口縁は緩やかに内湾し、外反する個体は1個も存在しない。器壁は決して薄いとは言えず、また厚ぼったくはない。皿・小皿とも掌サイズであり、持った感触は軽いと言えるだろう。粘土紐を巻き上げたような内外の凸凹痕は無く、型造りによる大量生産がされたものと思われる。

調整について、今回出土の土師器皿群の最も微妙な問題点として報告する。非常に遺存状態の良好な個体の上器表面を詳細に観察すると、まず目に付くのは内面全面に観られる1本約1mm弱の横方向に何条も巡る細やかな条線であるが、これは指撫痕ではなく、柔らかな刷毛状(筆状)具によるものであることが判別できる。硬質な刷毛では器壁面に凹凸ができてしまうが、この土師器皿群には器壁の凹凸はない。この刷毛目は体部～口縁部では横方向、見込み(内面底部)では1方向のみの縦線状となっている。観察ではこの見込みに初めて刷毛撫された後に体部内面に横方向にぐるりと刷毛撫でされていることが判る。但し、内外面とも同色であるが、外面にはこの刷毛目は全く観られない。

多くの個体を観察していくうちに気付くのであるが、この刷毛目が明瞭に観察できるのは、器体が白色のものに限られていることである。赤味を帯びた個体、灰褐色の個体には刷毛目は不鮮明である。そしてさらに白色の皿群の中でも白色が薄く半透明状になって、半ばその下の胎上がややオレンジ色に透けている個体が存在している。これらのことから刷毛目の観られる白い皿の器体表面は、尖は極めて薄い白色の土の膜であることが判る。この白い膜が剥がれたのかもしくは最初から無い個体は土師器独特の赤褐色を呈するのである。つまりこの白色の上の膜は化粧土(塗り)のような性格のもので、しかも外面にも観察できることから、白色の土を溶かしたクリーム状の液体の中に、これらの皿の完成品を漬けて上向きに引き揚げ、刷毛を使って見込み底の化粧土(液体状)から薄く伸ばし始め、次に体部内面をぐるりと撫でて調整したものと考えられる。

白色の化粧土を塗って乾燥させて完成したのか、或いはこの後さらに低温でもう一度焼いたのかは残念ながら判らないが、おそらく二度焼きはしていないものと思える。

なぜ通常の土師器の器体(素焼き)のままではいけなかつたのか、白い化粧土を塗ることにどんな意味があったのかはわからないが、皿を使用する上で機能的な理由、或いは皿を白く(美しく)見せる必要があったなどの呪術的な理由等が考えられるだろう。僅か5m²のトレチに5000枚以上の大皿が一度に土壤に残されていたわけであるから、当時大量の白い大小の皿が必要であり、割と安価で入手したことは事実である。このことからも使用目的は絞られるだろう。特定の人物だけが使用した高価な食器などではない。また逆に町内では中家横の中家周辺遺跡01-1区調査区5のみからしか出土例がないことから、この家(中家)における当時の大勢の関係者が一同に集結した際に、一度に手渡して(配って)使用した器であった可能性が高い。この点から酒宴・祝宴・祭事・に供する器だった可能性が考えられる。もしも極めて一般的な用途をもつ器であったなら、他所で出土する例がある筈である。この点は調整方法の観察と合わせて他市町村、近隣では特に堺環濠都市遺跡での報告例を調査したい。

また今回検出した土師器皿群は使用されたものか、未使用のものだったのかという問題も残

されている。①未使用のまま時が過ぎて不要となり瓦とともに投棄されたのか、②或いは割れやすいという土師器の性質を逆に利用して、盃などとして使用してそのまま粉碎したもので、後で片付け一所のごみ穴に捨てられたものなのか、③或いは使用後も洗浄され再利用され続けていたものなのか、等が考えられる。

検出状況と内業整理作業上の状況からして、完形もしくはそれに近くまで復元できる個体が多いことと、瓦・陶磁器の破片と共に出土することなどから、②の1回の使用でその場で粉碎された可能性は低いと考えられる。使用・未使用は不明であるが、おそらく1カ所に収納されていたものが、或る時点で瓦破片とともに…気に穴に投棄された可能性の方が高いと思われる。

瓦

軒丸瓦

今回出土した軒丸瓦の内、詳細に瓦当面を観察できる個体は7個体であり、瓦当面は大きく3通りに分類することができる。このことは各軒丸瓦が生産された僅かな時間差を示すものと考えられるだろう。

477は最も古相を示すものと思われる個体で巴文が唯一左巻きである。その他は全て右巻きの巴文である。連珠は14個である。ちなみに中家の家紋は右巴文である。477はあるいは中家の家紋が右巴文に固定される直前まで使用された軒丸瓦かもしれない。477以外の6個体は右巴であるが、特徴は巴の尾が長く、連珠は24個である。476と479は同范である。

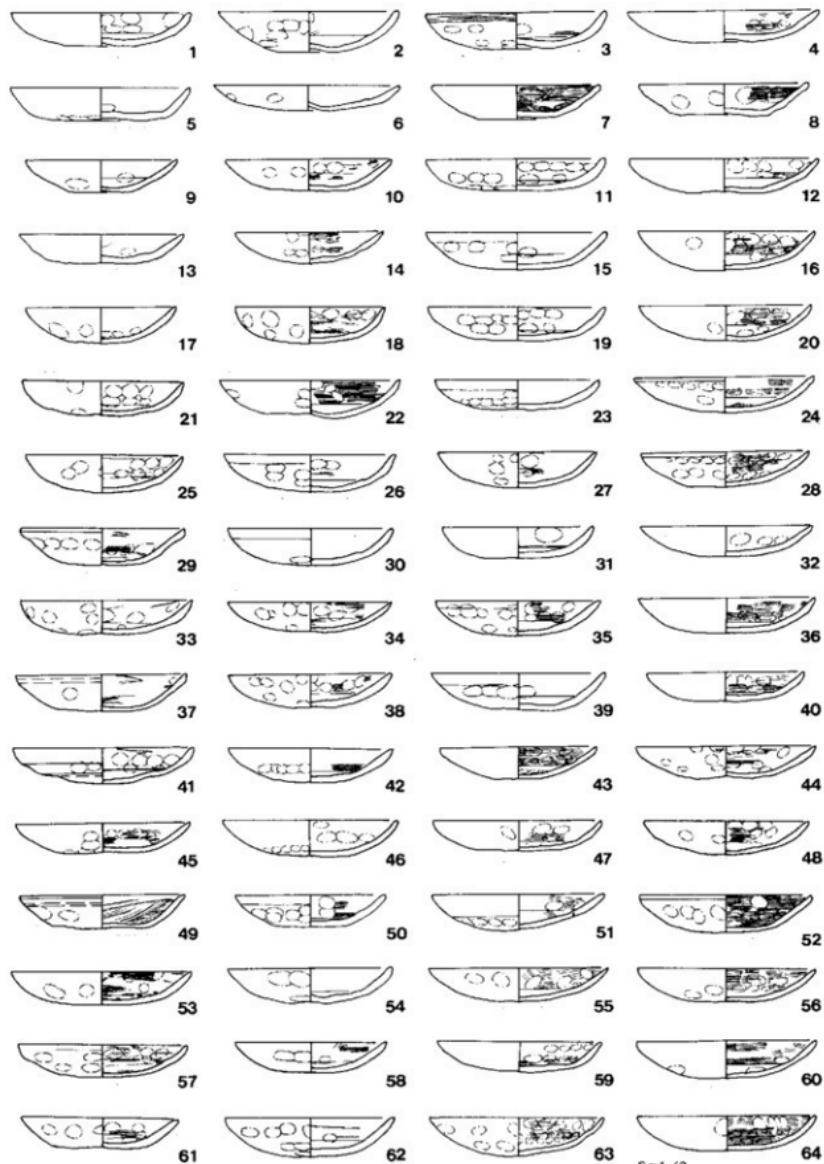
平瓦

中家住宅の軒丸瓦の検出例は非常に少なく、編年を試みるまでは至っていない。また熊取町内においても中世～近世の軒平瓦の検出数は少ない。

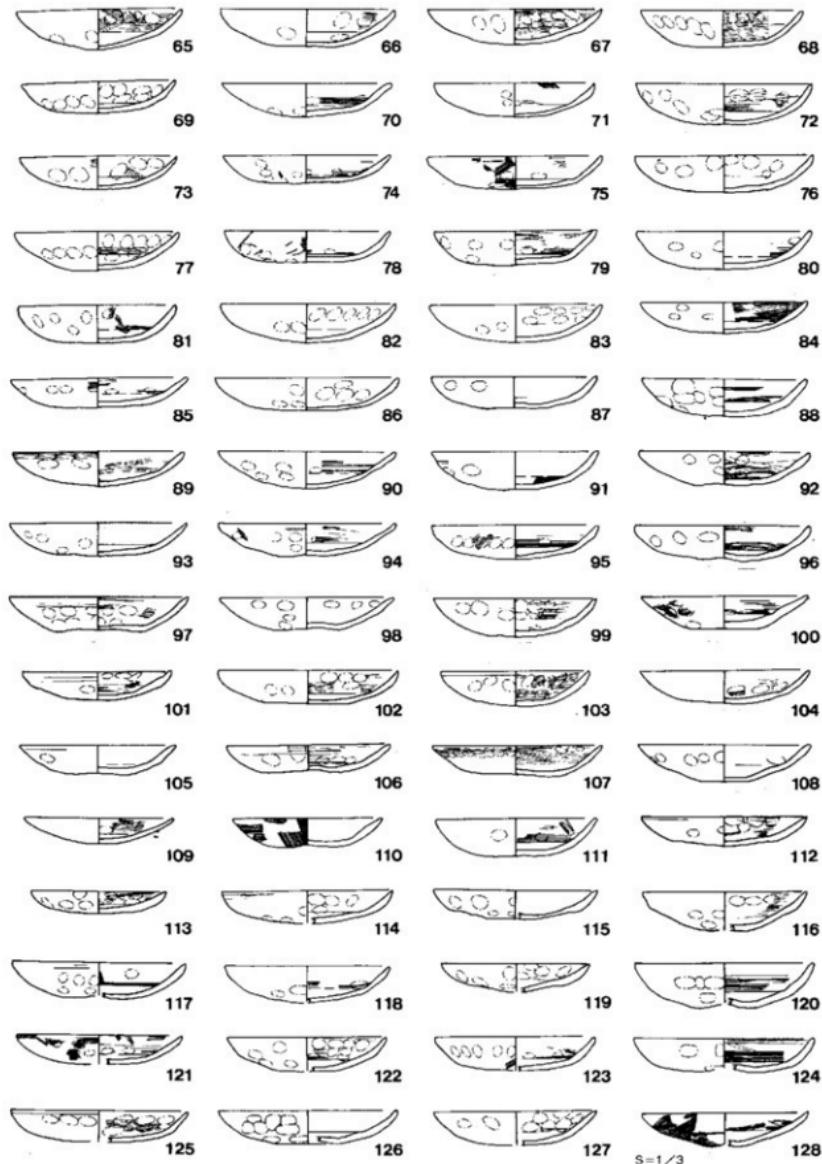
陶磁器

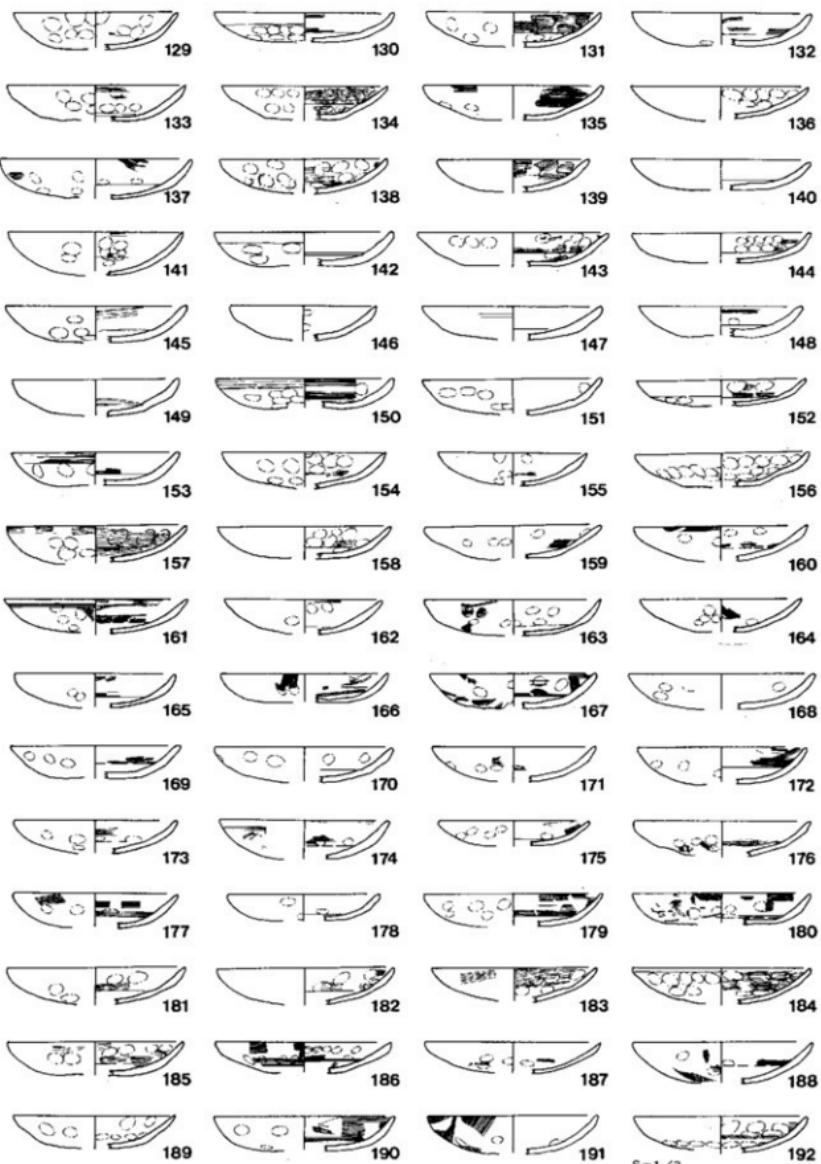
486は丹波の擂鉢である。鉗し目単位は5本で、底部見込みに向かって交差する。先の土師器皿群、軒丸瓦と共に伴する。

485は備前の擂鉢の口縁のみである。

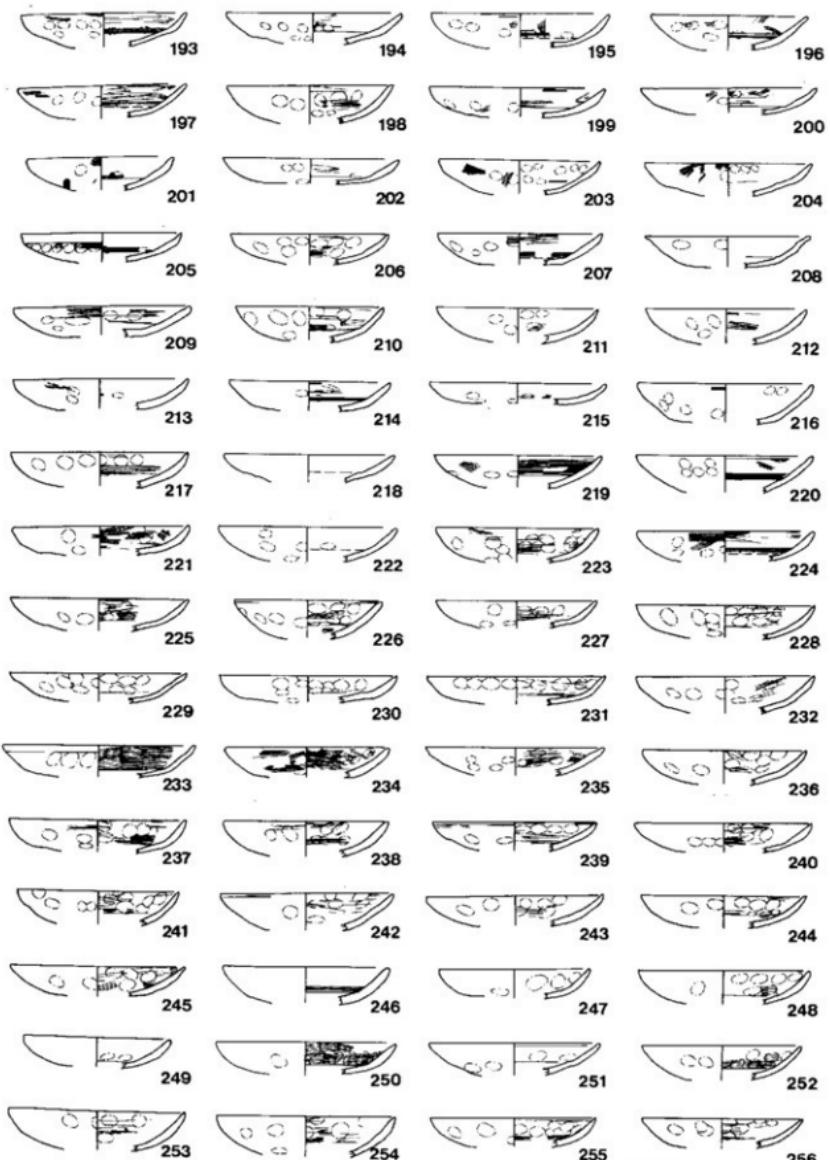


S=1/3

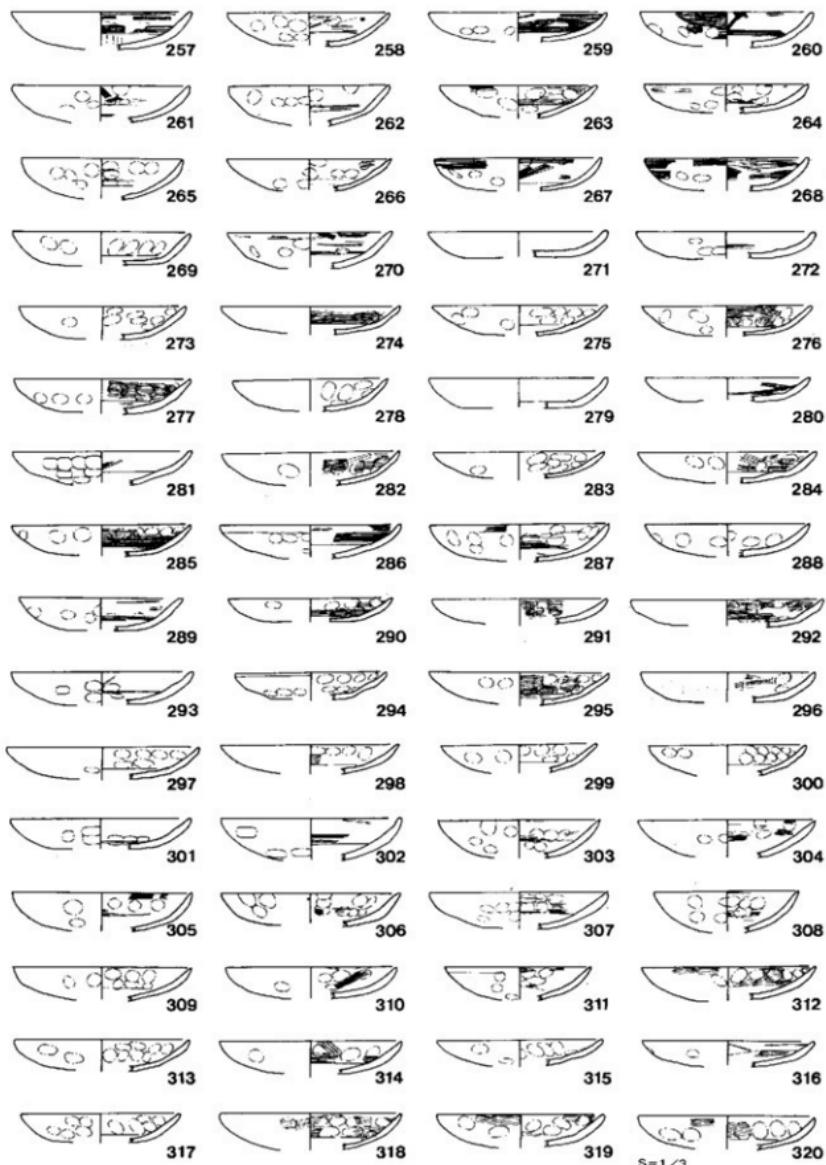




S=1/3



S=1/3





321



322



323



324



325



326



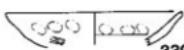
327



328



329



330



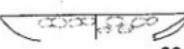
331



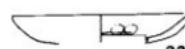
332



333



334



335



336



337



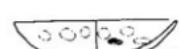
338



339



340



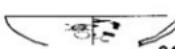
341



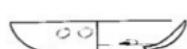
342



343



344



345



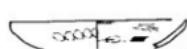
346



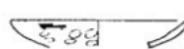
347



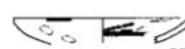
348



349



350



351



352



353



354



355



356



357



358



359



360



361



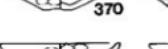
362



363



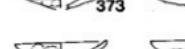
364



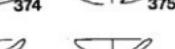
365



366



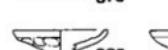
367



368



369



370



371



372



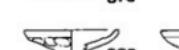
373



374



375



376



377



378



379



380



381



382



383



384



385



386



387



388



389



390



391



392



393



394



395



396



397



398



399



400



401



402



403



404



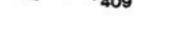
405



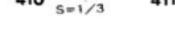
406



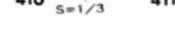
407



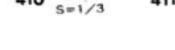
408



409

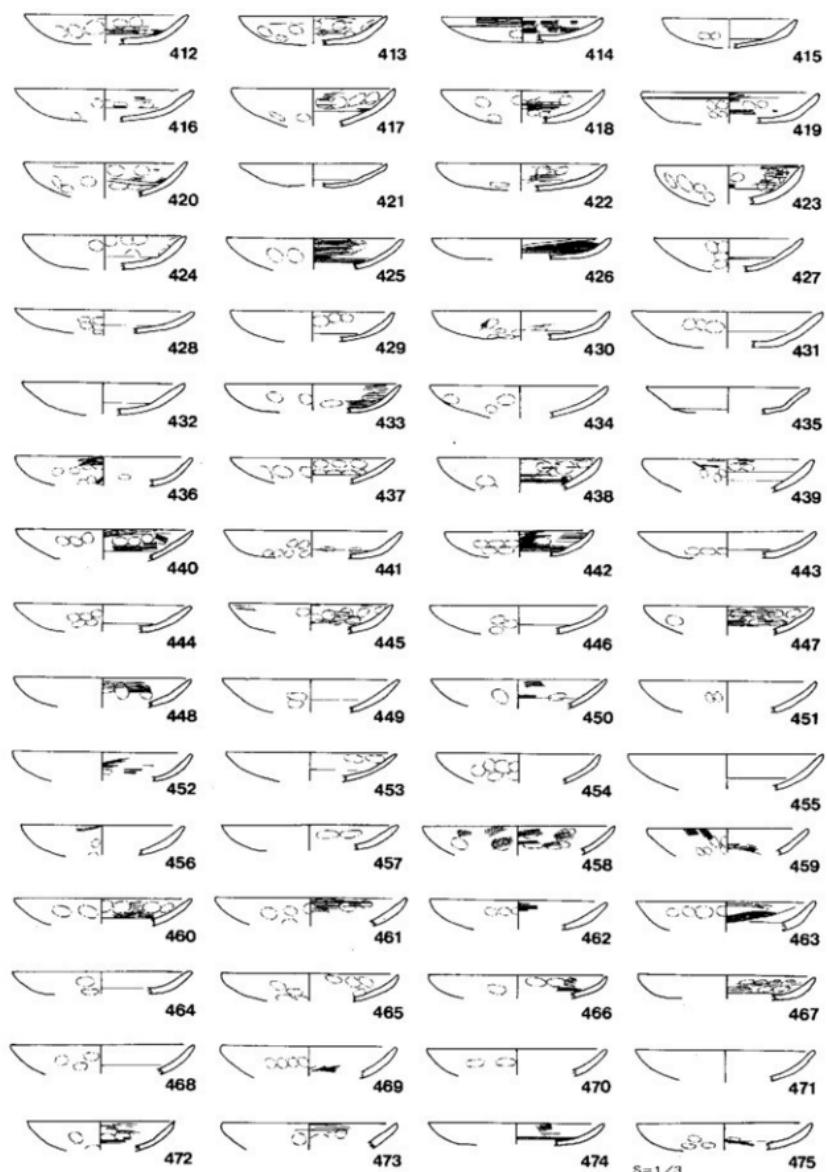


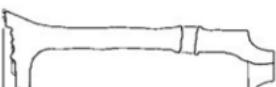
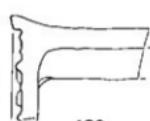
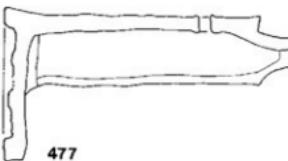
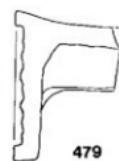
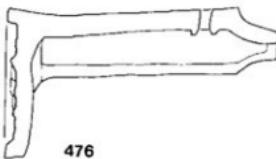
410



411

 $S=1/3$

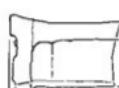




483



484



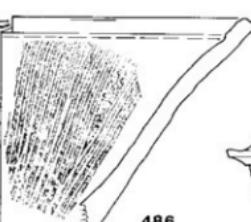
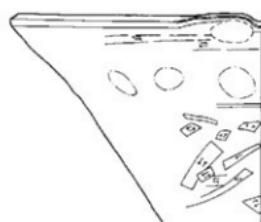
S=1/4



485



487



486



488



489

S=1/3

第4章 まとめ

今回の中家住宅周辺遺跡01-1区の調査は、重要文化財中家住宅の周辺で実施した調査としては、平成5年（中家住宅93-1区）、6年（中家住宅94-1区）、7年（中家住宅95-1区）、8年（中家住宅96-1区、96-2区、96-3区）に次いで5回目（中家住宅周辺遺跡01-1区）である。（このうち本調査を実施したのは93-1区・94-1区・95-1区）

NJS01-1区

●搅乱を受けていない中家住宅周辺の土層を検出

今回の調査地点には、昭和初期頃からの古い建物が存在していたため、これまで大きな搅乱を受けたことがないものと考えられていた。確認調査でもそのことが確認できた。またこの調査で得た調査区壁面データーでは、地山面となる黄褐色粘質土層の直上には野田の東円寺跡周辺で見られるような中世の灰褐色砂質上による中世包含層が全く存在していなかったことが判明した。14世紀以前は人家もなく、また耕地にも適さないような場所だった可能性がある。但し今回の確認調査で実施した6本のトレーニングで検出した地山の黄褐色粘質土面は一部凹凸があり、明らかに土木事業の痕跡を残しているものの、割りに平坦で黄色味も安定した粘質土であり、河川・氾濫原や河岸特有のやや大粒の礫や青灰色のシルト質ではなかった。このことから想像されるのは現在の熊取町にもまだまだ多く見られる雜木林のような灌木生い茂る微丘陵地である。その地山面の直上には中世末期～近世初期頃にかけての所産と考えられる一部瓦の小破片を含む層厚30～40cm程度の層がある。この層は6本のトレーニング全てで検出しているため、広範囲に堆積しているものと思われる層であるが、土師器皿群を作う土壤SK1が穿たれる以前に何らかの理由で堆積したもので、整地土・耕土両方の可能性がある。いずれにせよこの層がいとなまれたのは16世紀末から17世紀初頭の間と思われる。

●採取した土師器皿群を含む土壤SK1の上面は、現地表下-0.2m付近（海拔40.0m）で、17世紀前半頃の中家の生活面を示していると考えられる。

この確認調査で約5700破片となって出土した近世初頭の土師器皿群は1基の土壤（SK1）から一括して出土したものであるが、その土壤の上面が存在するのは現地表下-0.2m（海拔40.0m）付近である。江戸初期の生活面は今よりも僅かに低かったとみられる。この観察結果は、平成6年度に実施したNJK94-1区の調査で、重要文化財中家住宅の母屋の東側約0.2mの地点の地下海拔39.9mで発見された口径約0.8mの焼窯の大甕の出土状況に符号している。この大甕と今回の土師器皿群の年代はほぼ完全に一致しているものと考えられる。従って重要文化財の母屋を含む広い範囲で、江戸時代の初期は海拔40.0m前後付近で人々が営み暮らしたのではないかということが判ってきた。中家周辺に見られる搅乱土層と判別がつきにくい近世土層を調査する際に遺構面を設定する大きな目安となる今回の調査だった。

●土師器皿群・瓦群・陶磁器群を一括検出した土壤SK1の年代

今回一括出土した資料については、堺環濠都市遺跡（SKT）153地点の調査における第一次生活面上に検出された遺構で池SG01の下層青灰色グライ土層から出土した土師質皿・丹波焼

鉢・唐津椀のセットとの類似性を指摘しておく。(堺市文化財調査報告第51集 平成2年)

この池SG01は1615年～1652年の間の年代が付与されており、検出した白色の土師器皿群等は1652年の経王寺修造直前の整地に伴う地鎮に関する資料と考えられているようである。従って池SG01は1652年(慶安5年)に近い年代が与えられているものと思われる。

今回中家住宅周辺遺跡01-1区の上塙SK1から検出した一括資料を堺環濠都市遺跡153地点池SG01と単純に比較した場合は、土塙SK1は17世紀前半の年代を考えるのが妥当といえる。

●上塙SK1の性格

遺物・土師器皿のところで既に触れたが、1箇所の土塙から出土した土師器皿群の個体数を考慮すると、呪術的な地鎮などの理納土塙と解釈するべきかもしれないが、土師器皿群と完全に一括出土した大量の瓦破片と少量の陶磁器破片の存在からして、やはり不用品を地中に投棄したごみ穴的な性格を考える。

●土師器皿群・瓦群・陶磁器群の年代

SK1として開発された年代については触れたが、SK1から出土した個々の遺物の生産された年代や使用された年代についてはもう少し考慮が必要である。遺物のうち特に耐久性の高い瓦などは50年以上の使用年数が考えられる。最も古式の巴文軒丸瓦477と丹波播鉢486とでは年代がズレることもあるだろう。

●「熊取町史」から

この僅かな年代の間の中家はどのような状況であったのかを残された「中家文書」や研究者によって編纂された「熊取町史」に求めてみる。

中家は15世紀頃から熊取の多くの土地を買い占めて集積し、16世紀には守護細川氏の被官として熊取を治めた行松氏の屋敷地を、細川氏の没落に乗じて買い取るなど既に大きな経済力を保持する有力者になっていたことが推定できる。またその間中家はその子弟を次々と根来寺に送っていたことも事実であり、中家の背景には当時強大な勢力を持っていた根来寺があったものと考えられる。しかしそのため織田信長や羽柴秀吉とは敵対することとなり、戦火によって実質的に相当な被害を被ったものと考えられる。ところが秀吉が1598年に他界した後の関ヶ原の戦で、中家の一族で根来寺に修行していた中盛重という人物が東軍(徳川)方として戦闘に参加したため、直後に根来盛重として旗本となる大出世を遂げたことが、江戸時代を通して熊取谷を支配する根柢になったものと思われる。

今般01-1区で出土した遺物の多さは、関ヶ原の戦以降中家が極めて短時間のうちに復活し、一気に繁栄を迎えた事実を裏付けるものであると言えるだろう。1615年の大坂の陣を終え、17世紀の中盤に差し掛かる頃の熊取では既に中家が大きな経済力を持って営まれていたものといえるだろう。

●中家文書から

中家に残る中家文書は中世研究の資料として割合と知られている。中家文書の中で最も古いものは15世紀後半の年号をもつもので、この時期のものは僅かに数点現存するに過ぎない。16世紀の土地売券の一つに「しょうしゆ…」があって、五匁に新しく土地を購入したことが窺え

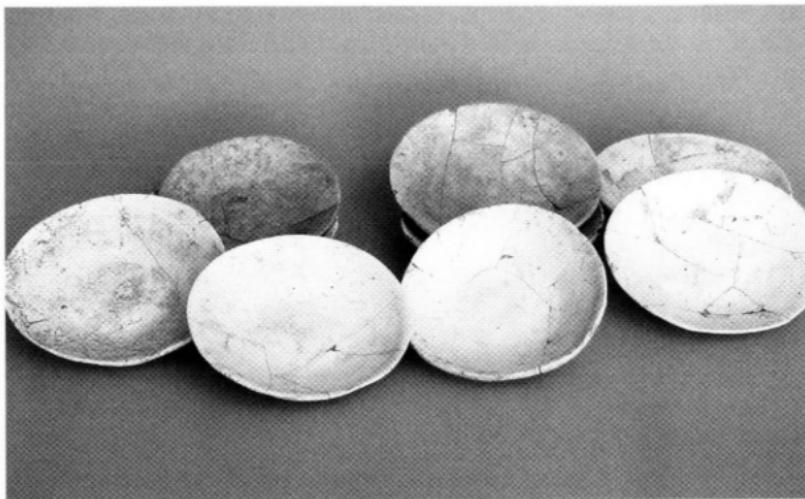
るものがある。「しょうしゆ」とはすなわち城主のことと思えるが、いわゆる一国一城の主とは違っていたらしい。17世紀以降になると文書は圧倒的に多くなり、中家近世文書として区別されるが、このことは中家周辺の発掘調査とりわけ今回の中家住宅周辺遺跡01-1 区で出土した遺物の年代と出土量の多さに比例している。埋蔵文化財発掘調査と中家文書は概ね符号するものといえるだろう。埋蔵文化財調査と出土遺物は中家文書のみでは知ることのできない中家住宅建物の創建年代や増改築、或いはもっとマクロな文化や習慣等も知ることが可能な極めて有効な資料そのものといえるだろう。



調査区5



調査区5 壁面

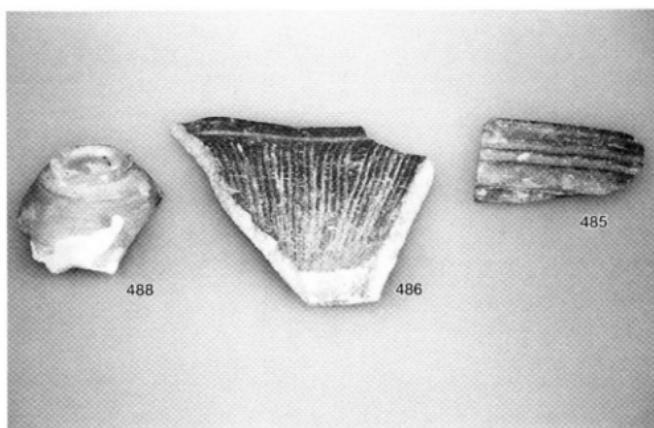


遺物 土師器皿



遺物 土師器皿

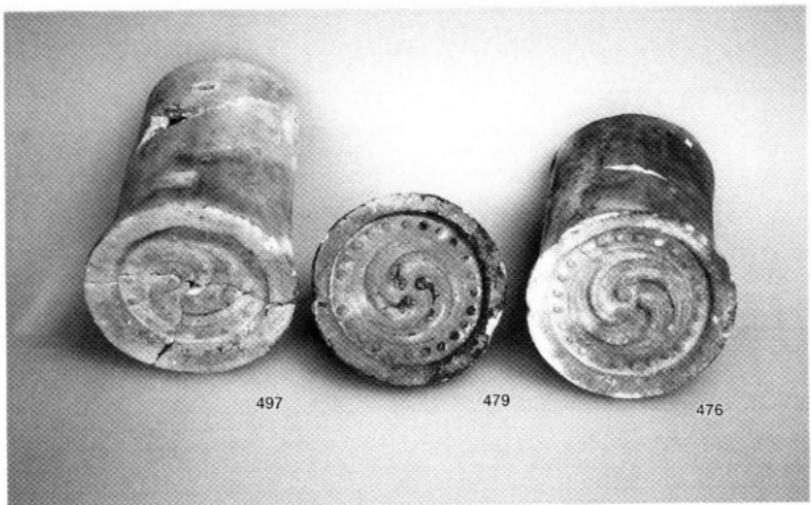




遺物 陶磁器類



遺物 軒平瓦



遺物 軒丸瓦

報告書抄録

ふりがな	なかけじゅうたくしゅうへんいせきはっくつちょうさがいようほうこくしょ							
書名	中家住宅周辺遺跡発掘調査概要報告書							
卷次	I							
シリーズ名	熊取町埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	第42集							
編著者名	前川 淳							
編集機関	熊取町教育委員会							
所在地	〒590-0495 大阪府泉南郡熊取町野田一丁目1番1号							
発行年月日	西暦 2003年3月							
ふりがな 所取遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東經	調査 期間	調査 面積m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号	° ′ ″	° ′ ″			
中家住宅周辺遺跡 01-1区	おおさかふせんなんぐん 大阪府泉南郡 くまとちょうごもんにし 熊取町五門西	27361	40	34° 23' 49"	135° 21' 06"	20010717 20010720	145.7	公園整備
所取遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
中家住宅周辺遺跡 01-1区		室町～江戸時代	土壙	近世土師器・陶磁器・瓦			5,500件を超す土師器瓦礫片	

熊取町埋蔵文化財調査報告 第41集
中家住宅周辺遺跡発掘調査概要報告書・I

発行日 平成15年3月
発行・編集 熊取町教育委員会
大阪府泉南郡熊取町野田一丁目1番1号
印刷 小笠原印刷(株)
大阪府泉佐野市上瓦屋646番地